

70 尾張藩蔵屋敷跡

福島区福島1-1-60(大阪中之島合同庁舎の東南部分)

▶ 徳川御三家のひとつ、尾張徳川家は、藩祖 徳川義直(徳川家康の9男で御三家では長兄)で清洲城を居城とし、尾張を支配しようとしたが、水害を受けやすい地形のため、居城は現在の名古屋が選ばれ、徳川家康が加藤清正をはじめ西国大名らに築城を命じました。尾張藩の知行高は61万9500石と裁定されました。

初代藩主 徳川義直、第2代藩主 徳川光友は、農政を整備し熱田新田を築くなど、農政に尽力を注ぎました。従来ばらばらだった年貢の率もこのとき統一されています。

中期になり、江戸幕府第8代将軍の継嗣問題がおこり、家臣領民は、徳川御三家の筆頭である尾張藩主が将軍に選ばれると期待していましたが、第8代将軍には紀州藩主の徳川吉宗が就任し、失望しました。その直後、尾張藩では第7代藩主に徳川宗春が就任し、将軍吉宗がすすめる「享保の改革」に相反する政策を行なったため、幕府より謹慎を命じられることになりました。その後、他藩から養子として迎えられた人物が藩主となり、尾張徳川家から将軍を輩出することはついに叶いませんでした。



初代藩主徳川義直



名古屋城天守閣



第14代藩主徳川慶勝



71 桑名藩蔵屋敷跡

北区堂島3-1(NTTテレパーク第3ビル)

▶ 関ヶ原の戦いで功績のあった本多忠勝は、10万石の大名として伊勢桑名・員弁(インベ)・朝家(アサケ)・三重四郡内を支配しました。忠勝の後を継いだ忠政が、大坂の陣で功績を挙げ、姫路に転封しました。移封後、松平(久松)定勝が、11万石の領主として入りました。

松平定勝を継いだ定行は桑名を治め、定行の弟 定房は、寛永12年(1635)、伊予松山城の城主となります。

元禄14年(1701)、桑名一色町から出火し、桑名城の本丸・二の丸・三の丸と侍屋敷130軒、寺社6カ所、町家1456軒を焼失し、藩の武器や諸道具、諸記録をすべて失いました。

当時の藩主 松平定重が幕府に願い出て、金1万両を貸与されましたが、町の復興には数年を費やしたといえます。

宝永7年(1710)松平(久松)氏から、松平(奥平)氏に代わり、松平忠雅が藩主として入封しました。

この辺りはたびたび水害に遭い、多大の損害を受けていました。

宝暦3年(1753)、幕府は薩摩藩主 島津重年に木曾川・長良川・揖斐川通の川普請手伝いを命じました。薩摩藩は幕命に恨みを抱きながら、総奉行に家老 平田靱負(ユキエ)を、副奉行に大目付伊集院十蔵が任命されました。

土地が難航が予想される中、藩にも費用面で余裕がなく、出来るだけ出費を抑えた形で、当初の見積り額は15万両でした。しかし見積り額をはるかに越え約40万両かかりました。費用の追加に加え、病死者が出たり、費用の超過に責任を感じ切腹する藩士もいて、薩摩藩士の死者は50名を超えたといえます。しかし、この時の工事以降は水害が減少しました。

薩摩藩は命をかけて、桑名藩ほかこの地域の洪水被害の危機を救ったこととなります。

文政6年(1823)、配置換えがあり、再度松平(久松)家が桑名藩に入封し、松平定永が藩主に就任しました。松平定永の父は老中 松平定信でした。定永の後、定和、定猷(サダメチ)と藩主が引き継がれましたが、定猷に子がなかったため、尾張徳川家の分家である美濃高須藩主 松平義建の五男定敬(サダメキ)が養子として入り藩主となりました。

元治元年(1864)、松平定敬は京都所司代を務め、大政奉還後までその職務を行いました。

桑名藩は会津藩とともに、勤王・佐幕で大きく揺れた維新直前の京都警備にあたりました。

しかし、鳥羽伏見の戦いに桑名藩や会津藩が加勢した旧幕府軍が、人数では少ない新政府軍に敗退し、徳川慶喜、会津藩主 松平容保らとともに密かに大坂城を抜け出し、江戸に逃げ帰ります。実の兄である松平容保と行動を共にし、新政府軍と戦うことを決め、桑名藩の飛地領の柏崎にある勝願寺に滞在しました。藩士も定敬のいる場所に集まり、総勢300人の部隊が編成されました。侵攻してきた新政府軍を桑名各隊が必死で撃退させました。

5月10日に始まった長岡争奪戦では、朝日山山頂に陣取った桑名藩士 立見鑑三が奇策をもって徴集軍を撃退させ、敵将の時山直八を討ち取ります。

その後、敗戦が続き、鶴岡近くで武装解除され、藩兵は謹慎、松平定敬は五稜郭に入りましたが、明治2年(1869)4月新政府に自首し、定敬の子定教(サダメリ)が桑名藩の藩知事に任命されます。松平定敬は、明治9年(1876)、罪を許され官位を与えられましたが、後に日光東照宮の宮司を務めました。



高須松平家(左から松平定敬(元桑名藩主)、松平容保(元会津藩主)、徳川茂徳(元尾張藩主)、徳川慶勝(元尾張藩主))



京都所司代を務めた松平定敬



桑名藩蔵屋敷跡



薩摩義士の史跡(三重県桑名市)と桑名城跡

代	藩主	築封
初代	本多忠勝	慶長六年(一六〇一)
二代	本多忠政	慶長十五年(一六一〇)
三代	松平定勝	元和三年(一六一七)
四代	松平定行	寛永元年(一六二四)
五代	松平定綱	寛永十二年(一六三五)
六代	松平定良	承応元年(一六五二)
七代	松平定重	明暦三年(一六五七)
八代	松平忠雅	宝永七年(一七〇〇)
九代	松平忠則	寛享三年(一七四六)
十代	松平忠啓	明和八年(一七七七)
十一代	松平忠功	天明七年(一七八七)
十二代	松平忠和	寛政五年(一七九三)
十三代	松平忠賢	享和二年(一八〇一)
十四代	松平忠茂	文政四年(一八二二)
十五代	松平定永	文政六年(一八二五)
十六代	松平定和	天保九年(一八三八)
十七代	松平定猷	天保十二年(一八四一)
十八代	松平定敬	安政六年(一八五九)

歴代の桑名藩主



桑名城跡碑



初代桑名藩主 本多忠勝像



薩摩藩義士の墓がある海蔵寺(桑名市)



海蔵寺に埋葬された薩摩義士

(寺の境内の石碑は明治四十二年に
建立され、明治五十二年に改修された)
上欄 ● 田代 下欄 ● 田代

氏名	氏名	没日	没日
官田法心居士	酒島玄左衛門	宝曆四年 八月 二十七日	天明
菅橋慶心居士	水古物兵衛	四月 十四日	
村松清昌居士	崎本守右衛門	九月 十六日	
日原屋入居士	藤崎伊右衛門	七月 八日	
本字宮守居士	川上右衛門	七月 十九日	
高尾院政宗子孫大居士			
大津玄道居士	平田朝貞	宝曆五年 五月 二十五日	
高尾院祐信居士	家村源左衛門	宝曆四年 十月 十四日	
高尾院長政居士	同右 下男 長助		
本惣親居士	野村兵部右衛門	八月 十四日	
根野長哲居士	岡本平兵衛	十月 七日	
	山元兵衛	十月 二十日	
磯原玄酒居士	泉澤高兵衛	宝曆四年 十月 二十日	天明
樽田全居士	別名不詳	八月 十三日	
額定安間居士	水田守右衛門	七月 十六日	
高林宗松居士	前田兵右衛門	八月 十九日	
遠藤宗本居士	和吉平太郎	八月 五日	
秋林宗兵衛居士	前田新兵衛	八月 二十日	

註記 海蔵寺に埋葬・田舎の者上 十四上
田舎に埋葬された墓碑 草
● 田代法心居士(水古物) 宝曆四年 六月 十五日 ●
● 高尾院祐信居士(水古物) 氏名 氏名 氏名 ●
この碑、高尾院玄左衛門の子孫高尾院の宗廟に代わり、高尾院在
在(寺)に代わり、高尾院(長助)とある(高尾院祐信)の墓碑を、百四
十年(宝曆六年)に建立されました。



中央にある総奉行 平田朝貞の墓碑

薩摩義士墓所二十一基

薩摩義士墓所二十一基

昭和十一年一月二十日指定
薩摩義士墓所二十一基

宝曆年間、水戸、長良、榎三火川の
持水工事に際し、御手伝骨積(骨でつた
ふしんに当った薩摩義士の工事の難
関に処してよくこれを克服したがその
功徳に、附身した重大な工事の難
題など責任を負って殉難した二十四
名の墓所(三名の墓碑は運滅)である。
この二十四名は凡て割腹した藩士はが
りて、中央は総奉行平田朝貞(ゆきえ)
正統法名 高尾院政宗子孫大居士・
宝曆五年五月二十五日(五十二才)の墓
碑である。

薩摩義士墓所
二十一年